

R. スコールズ著
折島正司訳

テキストの 読み方と 教え方

ヘミングウェイ

SF

現代思想

岩波書店

テキストの 読み方と 教え方

ヘミングウェイ
SF
現代思想

テキストの読み方と教え方

一九八七年七月二十九日 第一刷発行 ©

定価一八〇〇円

訳者 折島正司おりしま まさし

発行者 緑川亨

発行所 鉄岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五

電話 〇三・二六四二二
振替 東京六二六二四〇

印刷・精興社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

Printed in Japan
ISBN4-00-001448-X

この本を、五人のイタリア系の娘に捧げる。五人は両親を失い、教会に助けられながら、ブルックリンで育った。なかの四人はまじめな娘で、やがて学校の先生になった。

五人目のカメラ・マリア・イメロは遊びずきで、名字が変わって、私の母になった。宇宙へ届くテレビ中継のカメラが私のほうへ向いたら、手をあげて、挨拶したい。

「やあ、お母さん」と。

目 次

前^ズ「テキスト」—— 1

1 英文学という装置—— 7

2 教室の中のテキスト・一—— 31

3 教室の中のテキスト・二—— 65

4 教室の中のテキスト・三—— 93

5 テキストと現実世界—— 119

6 指示と差異—— 139

7 差異の左手—— 179

8 このテキストに魚フィッシュはいますか——207

9 だれがテキストなんか気にかける?——239

脱テキスト——267

注——269

訳者あとがき——277

索引

前^{フリ}ニ テキスト

「それは神聖な弁^{フリ}解^{テキスト}だ」

「神聖な弁^{フリ}解^{テキスト}などというものはない」

『薔薇の名前』 ウンベルト・エーコ

本書は、最近の文学理論を理解するために私が書きついできた本の三冊目である。最初の二冊、『文学における構造主義』、『記号論のたのしみ』ではそれほど目立たなかったひとつの問題に、今回は照明をあてようと思う。とは言っても、この問題にこれまでにコメントを加えてくれた読者や批評家も、いなかったわけではない。それらのひとびとは、理論と教育との関係に、私がこだわっているのを見抜いたのだ。かれらのコメントのおかげで、私はこの両者の関係に、もうひとつ気づかなかった側面があったことを知った。理論にたいする私の見かたが、じつはどれほど深く教育と結びついていたかを了解したのである。私は今では、カリキュラムや教育法のかかえるさまざまな問題を解くのに、どうすれば理論を役だてうるかをはっきり知るようになった。だ

が、そればかりではなく、それらの問題を理論的に提示し、明確に表現するさい、教育が手助けとなりうることをも知った。教育と理論とは互いを包摂している。この本は、そうした見かたを明確に表現しようとして書かれた。

本書を貫いて流れているのは、教育と理論との対話である。教育が前面に押しだされることもあれば、理論がさきに立つこともある。このように議論は、いわば揺れ動くのだが、それにまともを与えているのは、テキスト性とテキストの力という概念で、つねにあからさまにというわけではないが、本書は全体としてひとつの主張を行なっている。英文学の教師としてのわれわれの関心を、規範的な文学作品を志向するカリキュラムから、テキスト性を研究するカリキュラムに移行させるべきだという主張である。英文学というパラダイムまたは「装置」を、ひとつのテキストとして読む第一章のころみから、そうした議論が発する。つづく三つの章では、アーネスト・ヘミングウェイのたいへん短い物語を例に取りあげ、教室での基礎的な授業を素材として、「テキストの力」の概念を論じたい。そのあとの三章では視角を変えて理論に注目し、教育に議論の焦点をしぼっていたあいだは検討できなかったいくつかの大きな問題を追及することにする。まず第五章であつかうのは、テキスト作用の性質について「現世的」な理論家と「隠棲的」な理論家が戦わす議論である。ここでは、エドワード・サイード、テリー・イーグルトン、ポール・ド・マン、フレドリック・ジェイムソンのしごとを論ずることになる。第六章ではこれを継続させて、「ディコンストラクション」の「隠棲的」な側面を批判し、言語のもつ指示作用の次元を擁

護する。第七章では、『グラマトロジーについて』のある章句と、アーシュラ・K・ル・グインの『闇の左手』の主題のひとつを取りあげ、そこで言語と見知らぬものがどのように関係しているかを検討して、「ディコンストラクション」の「現世的」な面をしめす。第八章ではふたたび教室にもどって、作文教育でこれまで支配的だった考えかたを批判する。この考えかたはルイ・アガシーの生物学での教えとの類推にもとづいており、エズラ・パウンドが『詩学入門』でそれを世間にひろめた。最終章は、スタンリー・フィッシュがテキストの力にたいして最近行なった巧妙な攻撃への反論である。

このような本を書くということは、あきらかに、信念を表明することだ。それは、教育を改善し、新しい事態に適応させることが可能であるという信念、批評的な議論によって思考がより明晰になるという信念、とりわけ、文学理論と現実の教室とは深いかわりがあるという信念である。理論的な諸問題はむずかしくて手がとどかないとか、日頃行きあたる困難とは無関係だと感じている教師が多いことは、私も知っている。彼らの見るところ、理論は勝手にどこかの階に跳ねてあがってしまい、毒にも薬にもならない位置を占めているのである。理論家の中にはたしかにこうした見かたがふさわしい者もいるが、私が言いたいのは、実践的な教育がけっして自然でも中立的でもありえず、つねになんらかの理論を前提として隠しもっているということだ。だから、批評を教える者はだれでも、まず最初に、この隠された前提を明るみに出して、それを批判的に検討しなければならぬ。ポスト構造主義の理論が提供してくれるのは、まさしくこの

しごとを達成するための、きわめて洗練された有力な手続きなのである。だからポスト構造主義には意味があるのだ。

その一方で、人文系の諸学問は、現実世界と結びついている。現実世界は、学問研究機関というかたちで、これらの研究の生存を保証している。ソクラテスが知識を欲したのは、自分自身のためだけではなかった。彼は他のひとびとのためにも知識を欲した。これが、彼が教師だったということの意味である。彼の弁証法は、批判的なやりとりによって、共有される知識にいたる道だった。文学理論は思考だけからできあがった純粋な世界に存在するのではなくて、諸制度が網の目をなし、政治的な諸力に満ちた、現実世界の中にある。だから、理論家はたんにテキストばかりでなく、文学的・言語学的な研究がひとびとの教育に果たす役割についても、理論的な探求を行なわなければならない。だれもがその人生において、批判的にそれを認識してか、それともほんやりした犠牲者としてかはともかく、あらかじめ制度的に定められている役割をたびたび果たすことになるからだ。本書をつうじて底流し、ときにはつきりとすがたを現している考えかたがある。われわれは、テキストと同じように、われわれの世界を読みかつ書いており、また逆に世界によって読まれかつ書かれているからこそ、読むことと書くことが重要なのだという考えである。テキスト。そこを舞台としてわれわれは、なにが力をもっておりなにがもっていないかを見てとり、そして論議することができる。そこには、学識と無知とがすがたを現す。そこでは、われわれの思考と行動を可能にしつつ制約している諸構造に手を触れてみることができる。だか

らこそ、「英文学」というつましい主題が重要なのである。だからこそ、「テキストの力」という概念が問題なのである。

このテキストにも、あちこちに弱さを見ることができにちがいないが、そうした弱さがひとの目にさらされるまえに、友人や同僚の批判によって助けられたことが少なくない。その点でもっともありがたかったのは、多くのしごとで私と共同作業をしてきたクイーンズ・カレッジのナンシー・R・カムリーと、長年の同僚であるマイケル・シルバーマンである。教育おもにあつかった部分では、カムリーの意見にどれほど助けられたかしかない。文学理論を深く理解し、しかもおしみなくその理解を提供してくれたシルバーマンは、この期間をつうじて私にとって教育者的存在だったし、彼が何章かをていねいに読んでくれたおかげで、いくつもの間違いから救われた。グレゴリー・ウルマー、カチグ・テレリアン、リチャード・パースには、原稿をとおして精読してもらい、きわめて有益な批判を受けた。W・J・T・ミツチエル、マイケル・ライアン、エレン・ルーニーとは、それぞれ何章かについて議論し、おかげで最終的なテキストをおおいに改善することができた。それ以外に、本書のなんらかの部分を讀んだり聞いたたりして、助言や激励を与えてくれたかたがたは、ジョー・アン・スコルズ、エレイン・ショウワター、スーザン・グーパー、ジェラルド・グラフ、ジョン・スコット、ジェフリー・ラソム、ギンター・ゼラー、マーレイナ・ココラン、ステイーヴン・フォーリー、アントニオ・フェイジョー、ロバート・サリバン、レス・パールマンである。みなさんに感謝する。

本書にはすでに他の場所で発表された部分がふくまれている。第一章の一部は、ナンシー・カムリーと共同で書かれて、ウィニフレッド・ホーナーの『文学と作文』（シカゴ大学出版局、一九八三年）に収録された。第六章のごく一部は『クリティカル・インクワイアリー』に、第八章は本書とはやや違ったかたちで『カレッジ・イングリッシュ』に、第九章の大部分と第五章の一部は『ノベル』に、そして第七章はやはり本書とは違ったかたちで一九八三年秋のテュレーン大学メロン講演の特別報告に、それぞれ発表された。再収録を許可してくださったこれらの出版社、雑誌に感謝する。本書が完成できたのは、ブラウン大学によって与えられた研究休暇のおかげである。

1 英文学という装置

じつはある装置によって支配されているのに、彼らはその装置を支配しているつもりでいる。こう空想することによって、彼らは自分には制御できない装置を支持しているのである。この装置はもはや（彼らが信じているように）生産を高める手段ではなく、生産を阻害しているのだが、中でもとりわけ強く阻害するのは、まさに彼ら自身がたどろうとする新しく創造的な道筋が、この装置には都合が悪く、この装置の目的に反するような何かを生産することである。

『演劇について』 ベルトルト・ブレヒト

われわれはまた、医者がそこから言説を発する制度化された場所を、記述しなければならぬ……

『知の考古学』 ミシェル・フーコー

人間のさまざまな行為と文化のコードの関係は、ひとつひとつの発話と言語の^{パロール}関係と同じである。これが構造主義のもっとも基本的で長つづきのする洞察だった。それにつづくすべての記号

論的研究は、この洞察を基礎として築かれている。ネクタイをするとか、友人を抱擁するとか、料理するとかの行為はすべて、解釈のためのなんらかのコードの中で、記号として働くからこそ意味をもっている。人間はこのことに気づいており、それを嫌うことも多い。いろいろな冗談や奇想のたぐいが、正統性に挑戦し、コードを攪乱し、コード化された思考の通路からあたりまえの考えかたを追いだすために作りだされてきた。正統性はこれにこたえて、非正統的なふるまいをもコード化し、公認の無礼講のための時と所を設定し、道化師のための特別の衣服を指定し、詩人に奇妙なことをいう「許可」を与える。コード化とたわむれのこのやりとりは、人間存在につきものの様相のひとつである。

この偉大な構造主義的洞察が、文学・テキスト研究では、テキストとジャンルの関係は発話と言語の関係と同じであるという指摘となって現れる。ジャンルとは、関連する一群のテキストから推定されるコードのネットワークのことだ。ジャンルは言語と同じようにリアルであり、言語と同じような圧力をそのコードのネットワークをつうじて発揮する。ジャンルはまた言語と同じように、その命ずるところに愚鈍にしたがう者と、それに軽やかに挑戦する者に出会う。なんらかの技法の歴史をまじめに研究したことのある者ならだれでも、前例、類的特徴、前提、約束事といったもの、文学研究でジャンルとかスタイルとかよばれるすべてのものが、じつさいにテキストが生みだされるときに重要であることを知っている。特定の歴史的状況について知れば知るほど、技法上の些細きわまりない革新でさえ、あらかじめ与えられたジャンルやスタイルにかん

する慣行を、まず自分のものにし、つづいて乗り越えるための苦闘を、背後に隠していることが分かってくる。

ジャンルとスタイルというこのふたつのことは、ゆるやかに用いられることが多い。これらのことばの意味を完全にはつきりさせることは、おそらくできないのだろう。しかし、ここでの議論のために、このふたつのことばのあいだに、すくなくとも出発点となるような区別をしておくのは、無益ではないだろう。ジャンルは、繰り返し同じように作りだされる物を指し、スタイルは、ものごとを行なう定まったやりかたを指す。絵画でいえば、風景画はジャンル、印象主義はスタイルである。ジャンルは社会的、持続的であって、スタイルが変化しても生き残る。スタイルはより局所的であり、そして、ジョンソンの喜劇にたいするシェイクスピアの喜劇とか、ルノアールの印象主義にたいするモネの印象主義とかいうときのように、しばしば個人的である。だが、ジャンルもスタイルもともに、繰り返し返されるコードやパターンのすがたをとって現れる。そしてこれらのコードやパターンを、一群の具体的なテキストの分析によって、再構成することができる。

ある種のポスト構造主義者、とりわけミシェル・フーコーは、諸制度をジャンルになぞらえて研究することに先鞭をつけた。こうした研究方法を用いると、「監獄というもの」や「病院というもの」を、ジャンルに似た歴史的な制度の一種、すなわち、個々の監獄や病院が現実にとりうる形態を決定するシステムと見ることができると、特定の文学ジャンルは、それが歴史的に許容する

可能性にもとづいて個々の文学テキストを発生させる。これにならって、刑罰についての特定の時期の考えかたをジャンルに見たててなら、それによつて生みだされたり制限されたりする個々の監獄はテキストだ、と言えることになる。「言語」という概念によつて、われわれの発話にかたちを与えている力に接近できるように、ジャンルやスタイルといった概念によつて、テキストの産出にかたちを与えている目に見えない力に接近できるのである。これらのばあいつねに、この発話、この特定のテキスト、この特定の監獄または病院といった有形のものが、英語、ピカレスク小説、刑罰学または医学という制度といった無形のものとの関係で見られている。みずからは無形でありながら人間の行動に有形の影響を与える、制度、ジャンル、言語などこれらの概念は、思考のための力強い道具である。そして、これらの概念が相互に関連していることは、ようやく最近になって認識されるようになってきた。このように言語、ジャンル、制度が互いに関連していることが新しく分かつてくるのにつれて、多くの研究者たちが、自分の学問分野の広がりを見直し、研究対象そのものを再発見するようになっていく。クリフォード・ギアーツが『文化の解釈』⁽¹⁾でしめたように、人類学的分析は文学批評に類似してきたし、逆に文学批評は今では人間の行動が文化的、制度的にどのようにコード化されているかの問題に戻ろうとしている。われわれの好むと好まざるとにかかわらず、これが現実だ。問題は、われわれがどのようにそれに適応するかである。というのは、「われわれ」も、ひとつの学問的制度に参加していて、じつはこの学問的制度もまた、われわれの専門家としての生活を可能にすると同時にコントロールしている